
月の引力

Ykiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の引力

【Nコード】

N1884D

【作者名】

Y k i k i

【あらすじ】

夢に迷う可奈。仕事に恋に迷い、成長していく可奈が見つけたものとは・・・？

プロローグ

その左手が、私の右手に触れる。

右手は強張ってその手から離れようとするも、手の力は強く、逃れられない。

右手を圧迫する温もりは、理性や孤独感を角砂糖のように溶かしていく。

ああ…。もう、いいや。

酒気を帯びた空気はさらに角砂糖の溶解を速め、甘い匂いを誘い込む。

ユルユルと私をつつみ、溶けてなじむ。その空気が「こんなはどうってことない。誰だってやってるよ。」と甘く導く。

頬に添えられた右手は、私の体温の上昇を察しているのだろう。

男の微笑が眼に映る。男の声が空気に交じる。それは私にだけ響く声。その声は近くもなく、遠くからというわけでもなく響き、私に残る疑心を、柔らかな羊水のように浸していく。

孝之の顔がぼやけて浮かぶ。左手のリングが熱くなる。抵抗する。

間違ってる？私は間違ってるの？孝之が悪いんだよね？淋しいんだよ。本当は孝之といたい。一緒にいたい。独りにしないで。置いてかないで。

目の前の男に孝之を重ねる。

大丈夫、孝之はまだ私を愛してくれてる。

目を閉じると、男の唇が重なる。温かく柔らかな感触に安堵し、笑みがこぼれる。

大丈夫、孝之は私を愛してくれてる。

プロローグ（後書き）

初めて書いた小説（と言えるかわかりませんが）です。楽しんでいただければ幸いです。拙い文章ではございますが、何卒ご指導のほどよろしく御願いします。

ああ、苛々する。今日もドタキャンされた。つまらない男。仕事のほうが大事だなんて。

久しぶりだったのに。

久しぶり…、この前会ったのはいつだっけ。先々週もキャンセルだったし、先週は約束もしなかった。

一体いつなんだろう、思い出せもしない。今じゃメールも電話の回数も減った。

「おはよう」や「おやすみ」のメールからさえ、孝之の優しさや愛しさを感じていたのはいつまでだっただろう。

「愛している」という文字を素直に受けとっていたのはいつまでだっただろう。

怒りのために荒かった足取りも、思考と共に次の一足が鈍る。鼻の奥が熱くなり、薄っすら纏った涙が街のネオンをにじませる。はぁ、と力なく漏らした息が揺れ、冬の夜の張り詰めた空気に白い跡を残すが、それもすぐに消えていく。

「もう、ダメなのかもしれないな。」

小さくひとりつぶやくと同時に、コートのポケットから携帯の振動がメールの着信を知らせる。

「山村沙里 今日暇かな？一緒に夜御飯でも食べない？」

沙里からのメールに小さな安堵のため息がもれる。
良かった、一人で過ごさなくて済む。

沙里にグチでもこぼして落ち着こう。

「山村沙里　OK！じゃ三十分後に駅前で！！」

待ち合わせをきめ、駅へ向かう坂を下る。

ブーツのヒールが高いのは少し不安定でも、足取りがさつきほど重くないのがわかる。

石のひかれた坂を下り、時間に余裕があることを考え、駅までの道は少し遠回りして海岸沿いを歩くことに決めた。

冷たいけれど穏やかな風が通り過ぎる。

海に視線を落とすと、ぶよぶよした暗い海の表面を、港の明かりや船の明かりがゆらゆらと泳いでいる。

海に浮かぶ船や対岸の工場やマンションの灯、いくつもの家の灯りが不規則に並んでいる。山は翳り始めた空の色を背景に立体的な影絵を創り出す。

ああ、仰ぎ見る空には星がもう輝きを放っている。

いつものように視線を徐々に上げ、この街の空を仰ぎ見るように歩く。

街のどこを見ても、視界に入る景色には何かしらのストーリーが潜んでいる。

海も、港も、街も、山も、空も。すべてが歴史と言う縦系によって一つに紡ぎあわされている。

それは時に鮮やかな繁栄の横系によって紡がれ、時に悲しみの糸であり、優しさの糸であったはずだ。

そして、複雑に紡がれた街は何かとてつもなく大きな揺るぎのない存在として、私自身を受け止めてくれているかのように感じる。

薄い三日月が紫の空に浮かんでいる。

風が強いのか、グレーの薄い雲が姿を包み込もうとしている。

月か…、今の私も欠けているのかな。

大学を卒業し、大手とは言わないだろうがそこその企業に就職、始めの頃こそ認められたいと、はりきっていた。

資格も必要以上に取得し、残業だって進んでやった。

すべてが自分のために、会社のために、社会のためになるのだと信じていた。

しかし、いつもと変わらない仕事、家からの往復。

かつて私をときめかせたものや情熱は長く留まることはなく、取り戻したいと願っても、売上や数字に囲まれる日々の生活からその熱は確実に滑り落ちてしまった。

こんな私は、何かを得たように思っても本当は何もないままなのだろうか。

だから…、孝之も…？

沙里からのメールで少し持ち上がった気持ちも、一人思考しているうちに悪いほうへスパイラルしていく。

クリスマス前の週末のせいか行き交う人が普段より多い駅前の高架広場に着くと、沙里が先に来ていた。

まだ私に気付いていない沙里の凜とした横顔、風にそよぐ艶やかで柔らかな髪、ゆれるスカート。

季節柄それじゃ寒いのではないかとも思うけれど、それでもそんな沙里の立ち姿に思わず足を止めてしまう。

沙里は、高校の時から私の憧れだった。

その大人びた顔立ちや整った外見はもちろん、それ以上に沙里のもつ人当たりの良い雰囲気は周囲を安心させ、誰もを惹きつけた。

そんな沙里を妬ましく思ったこともあった。

沙里のもつ幾つものギフトは、私にはどうあがいても持ちえようがなかった。

それでもそれ以上に親友と呼ぶことのできるのは幸せであり、自慢でもあった。

沙里と共に過ごすことで、私まで素敵な女の人になった気がする。

「沙里！ごめんね、待った？」

「ううん、大丈夫。今来たばかりだから。」

私の方へ向き直ってふわりと笑う沙里は、どこかいつもより華やいている。

「良かった。で、どこ行こっか？」

「あ、それなんだけど、ちょっと行きたいお店があるんだけど、どうかな？」

「うん、いいよ。どこ？」

「ふふ、ちょっと行つた所なんだけどね。」

沙里は少し照れたように笑い、私は沙里と再び海岸沿いを歩き始めた。

やっぱり今日の沙里は何か嬉しそうだ。
良い事でもあったのだろうか。

「ここなんだけど。」

沙里が連れてきてくれたお店は、この街に良く似合うレンガ張りのビルの一階と二階にあった。

海沿いにあるこのビルの二階の湾が見渡せるほど大きな窓からは、柔らかなオレンジの明かりが店内を照らしているのがわかる。

しつかりした造りの木製のドアを開けると、カウベルのカラカランとちょっと低めの小気味の良い音になる。

「いらっしやいませ。」

と、こつちを振り向いた店員が、

「あ、この前の。来てくださったんですね。」

と、アゴに生えている無精髭まで踊りだしそうなほどの勢いで、顔

をほころばせる。

「先日はありがとうございました。本当に助かりました。」

沙里は丁寧にお辞儀をして、お礼を添える。

少し面を食らったが、なるほど、なにかあったんだ。

お礼のためだけなのか、加えて沙里がこの店員に何か好印象をいだいているのか、とにかく沙里も話を聞いて欲しいんだろう。

「お二人様ですね、でしたらせっかくですので二階の窓際の席に案内いたしますよう。」

と、無精髭の店員は席まで案内してくれた。

板張りの床と階段は柔らかな木を使っているようで、ヒールの靴でも歩き易く、店の雰囲気も手伝ってか、少しの高揚感を得る。

初めてくるお店にはいつもドキドキする。

何か新しいことに出会えるかもしれないという気持ちになる。

しかも、今日は沙里から楽しい話も聞けそうだ。

とりあえずビールをオーダーし、外を眺める。

さつき独りで風に吹かれて見た景色とは違うものに見えてくる。

オレンジの照明が正面のガラスに反射し、店内の様子を模倣する。

その向うに広がる夜の湾の景色。

さつきまでの喪失感もどこへ行ったのか暖かな空気が包み込んでいく。

「キレイね。」

「うん。」

沙里が窓の映す景色をどのように捉えていたかはわからないが、沙里の雰囲気にごく似合っていると思うし、なによりこの景色を共用できることが嬉しいと思う。

「そうだ、なにがあつたの？さっきの店員さんと。」

私はさも今思い出したようにさっきから気になっていたことを切り出した。

「え？あ、そうそう。まあ何があつたって訳じゃないんだけど。西門さんっていうのね、さっきの店員さん。」

「西門さん？」

「うん、西門さん。実は先週クライアント先に持っていく書類をバス停に置き忘れちゃって。」

「うわっ、それは大変だったねえ。」

「そうなの、まあその日すぐに必要な書類ではなかったんだけど、やっぱりなくすなんてね、信用にもかかわるじゃない。家に帰って帰ってまでやらなきゃよかった！って思ったんだけど、そういう問題でもないし……」

と、沙里の目がバーカウンターの方へ移り、それで私はさっきの店員、もとい西門さんがこちらへ向かってくるのに気付いた。

「お待たせしました。生ビールですね。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

ビールの注がれた周りの照明の色を吸い取ったかのような琥珀色のグラスが、目の前に置かれる。

いつものビールも、沙里が居て、素敵な話が聞ける。

これだけで宝物のような飲み物に見えてくる。

きらきらと、すこし高めのグラスの底からすわすわと流れ、浮いていく小さな泡。

白く細やかで滑らかな無数の泡は、私と琥珀の液体を優しく結びつける。

しゅわしゅわと炭酸が舌や喉を柔らかくなくていくのが心地いい。

「ふう、それで？」

「ふうって、親父じゃないんだから。」

「まあまあ、いいじゃん、おいしいんだもん。」

「もう。そうね、で、たまたま西門さんがその時バス停にいて、書類に気付いたらしいの。」

「え、まさか走ってバス追いかけてくれたとかっ！？」

「まさか、そこまでできないでしょ。」

アペタイザーの少し酸味のあるフルーツトマトを食べようと口に持っていてこうとしていた沙里が、噴出しそうになって、フォークを口から遠ざける。

「でもね、封筒に会社の住所が書いてあるのを見て、持って来てくれたの。」

「会社まで？ああ、このお店沙里の会社に割りに近いしね。」

「そうなのよ、西門さんも近くだったからついですって言うてくれて。」

「はあ、優しいねえ。」

笑みを浮かべてそう言った声は、飲み込んだトマトの味の良さのせいもあって自分でも思った以上に力がこもっていた。

「そう思う？」

「うん。それで、沙里はその優しさに惹かれちゃったわけだ。」

「まあ、まだわかんないけどね。」

そう言いながらグラスの足をなぞる指を見つめる沙里の少女のような目が、なんだか羨ましかった。

羨ましくて、悔しかった。

私はしばらくそんな目をしていない。

「おまたせしました。こちらオススメのベトナム風エビフライ、マスタードサラダ、それからポテトのスープサラダです。」

「あ、ありがとうございます。」

「いえ。」

西門さんがテキパキとお皿を並べると、スパイシーな匂いが鼻をくすぐる。

ああ、さつきからへこみっぱなしのお腹が歓声をあげる。

「このポテトサラダ、変わってますね？」

透明のスープに薄切りのジャガイモの小さな山がスープに浸っているサラダは、確かに変わっている。沙里が聞かなかったら私が聞いていただろう。

西門さんが気を使ってサラダを小皿に取り分けてくれる。

「あ、気付いてくれました？ 美味しいですよ、食べてみてください。」

感想を期待するように、目を輝かせているその顔は、髭が生えているにもかかわらず、子供っぽくて思わず笑いそうになってしまう。スプーンをスープに沈ませてジャガイモと一緒に口に運ぶ。

ビネガーの少し効いたスープは適度に冷えていて舌になじみ、ジャガイモの甘さが広がる。

優しい味。

「おいしい。」

顔をあげて沙里とお互いの目をあわせる。

ふたりとも声がうわずっているのがおかしい。

「でしょ。実はこのジャガイモ、実家で作ってるものなんですよ。レシピも親譲りで。あ、でも他の料理もおいしいから、どんどん食べてね。」

感嘆の声をあげられたことが嬉しかったようで、得意そうな顔をしたら西門さんは、ごゆつくりどうぞという意味をこめた軽い会釈をし、別の接客へと行った。

ナムプラー味のエビはライムを搾っていただく。エビのぷりつとした身は歯切れがよく、粒マスタードの効いたインゲンやチキンのサラダも次々と口へ運ぶ。

ライムの爽やかな香りもマスタードの鼻の刺激も、アルコールをすすませるのには充分魅力的で、私達は次々とグラスを空け、新たな料理を注文していった。

アルコールは気分を高揚させる。

孝之からドタキャンされて落ち込んでいた気分も、そんなことは些細なことだと思えるようになってくる。

気付けば三時間以上沙里と二人で、時には西門さんを交えながら話をしていた。

何があつたって訳じゃない、でも私を柔らかな空気がつつんだ。

今夜は気持ちが穏やかで、優しい気持ちになっているのがわかる。

帰りのバスに揺られ、窓の外を見る。

光が後ろへ流れていく。

バスの座席の適度な揺れと、充足感とほろ酔い感が手伝って、眠気が増幅されていく。

少し呆けていたせいで、コートのポケットの携帯が着信を主張するの気付くのが遅れた。

桃色に光る外部ウィンドウは孝之からメール。

まぶしい恋の色。

孝之…、どうしたんだろ。

いつもはドタキャンしてもメールなんて打って来ないのに。なんだろ、なにかあつたのかな…。

メール、見たくないな。

いつもと違う孝之の行動。

それだけで不安になる。自分がゆらぐ。

まだ見てもいない内容に不安になるなんて馬鹿げてる。

こんなんじゃないダメだってわかってるけど…。

「柏原孝之 件名：ごめん 今日は急にゴメンな。代わりってわけじゃないけど、明日ドライブにでもいかないか？」

他愛のないメールだった。

他の誰かの目で見たらそうなのかもしれない。

でも、私には、私にとっては、このメールだけで取り戻せるモノは、信じられないくらいに大きい。

ああ、愛されてる。

なにを心配していたんだろう。

大丈夫。

私は大丈夫。

グレーの空から雨粒が落とされる音で目がさめた。
厚手の遮光カーテンを開けると目に映るビルも家も、道路も、木々の葉も雨に濡れていた。

雨が…、冬の雨って暖かいから、ちょっと嬉しいかも。
んつと背伸びをして、なはあつと眠気をとばす。

今日は久しぶりに孝之に会える。
久しぶりすぎてちよつとにやけてしまう。
待ち合わせまでは後三時間、洋服選びに靴選び、整髪に化粧。
やることはたくさんある。
二度寝する暇は、ない。

パイピングの入ったモカ色のプリーツスカートと、黒いタートルに鮮やかな青ニットボレロ。
ちよつと長めのAラインのコートに柔らかなワンピース。
それともベルベットのジャケットに白いシャツ、厚めのタイツをはいて昨日の沙里みたいに軽やかに風揺れるようなシフォンのスカート…は、ちよつと寒いかな。

鏡の前とクローゼットを行ったり来たり、クルクル回っては、ううむと唸る。
いつのまにかソファアの上に洋服の山ができている。

久しぶりに会ったから、キレイだとかとか、可愛いだとか思われたい。

コイツが彼女で良かったって、やっぱり私を好きだって深く思ってた欲しい。

そして笑って。

私の大好きな、私の中に潜む影を全て吹き飛ばしてしまうような孝之の笑顔を見せて欲しい。

ただそれだけあれば生きていける、私のその想いが錯覚であると誰に言われても拒絶できるくらいに。

パールピンクの爪先も、長くカールさせたまつ毛も、全部愛されたいから。

何かが足りない私を埋めてくれるのは、孝之しかいないから。

孝之が放つ私への想いをスポンジのように受け止めて、ようやく私は私になれる。

2 - 1 (後書き)

更新遅れてて申し訳ないです。
しっかり、定期的にできるようがんばります。

ヴヴヴ…、テーブルの上においてあった携帯電話が鈍い振動とともに孝之からの電波を受け取る。

「あ、もしもし、おはよう。」

「おはよう。もう着いたよ、準備できた？」

「うん、あとちょっと。すぐ行くから待ってて！」

予定の時間より少し早い孝之の到着は、約束の30分前には全ての準備を整えてソワソワしていた私を軽やかに受け止める。
少しでも早く来てくれることが、嬉しい。孝之が私と会うことを楽しみにしてくれている証拠だと。

部屋にカギをかけ、カンカンと階段を駆け下りると孝之の青いコンパクトカーが私を待っていた。

助手席に滑り込むと、懐かしいような照れくさいような匂いが鼻をくすぐる。

「おはよう。久しぶりだね。」

「うん。」

「しばらく会ってなかったから、なんか恥ずかしいね。」

「え？あ、うん。ホントだよ。まあ。」

孝之からそんな台詞が出るなんて思ってたから、少し戸惑ってしまった。やばい、にやけそう。

上気して緩みそうになる顔を抑えて平常心、平常心と心の中でつぶやく。

「ごめんごめん。でも仕事忙しくてさ。」

「そっか、そうだよ。今日はゆつくりできるの?」

「うん、久々にね。だからちょっと遠出しない?」

「いいけど、体大丈夫?」

本当は遠くまでドライブしたいけど、孝之は仕事で疲れてるんじゃないだろうか。

雨の中を青空のような車がゆつくりと動き出す。

「大丈夫だよ。遠出つて言っても県北。とりあえず温泉いかない?」

「うん、いいね。温泉ならゆつくりできるし。最近寒いのにシャワ

ーばかりだったから、ちょっと嬉しいかも。」

「え、ちょっとだけなの?」

「うっん、嘘。ホントはすごく楽しみだよ。」

「どのくらい?」

「どのくらい? そうだねえ、ん。」

孝之をチラリと見る。孝之は私に甘えたような視線を投げかけている。

「もう、ちゃんと前見て運転してよ。」

なんだか恥ずかしくて、嬉しくて、少し憤慨したフリをして孝之に言う。

なんて甘い時間が流れているんだろう。

他の誰にだって共有されたくない時間。

私は孝之から放たれているもの全てを取りこぼさないように、持ち得る全ての感覚を駆使してキャッチする。

そして、受け止めたそれを私の足りない部分に注ぎ込み、満たしていく。

アナタがここにいることが、こんなに嬉しい。

孝之と過ごす時間がこんなにも愛しい。

ただ流れていくこの柔らかな時間を掬い上げて、この両手で優しく抱きしめることができたならどんなに幸せだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1884d/>

月の引力

2010年11月13日02時42分発行